

【 特 集 】
盛り上げよう日本のバスケット
—— 現場第一線記者に訊く ——

実施日 平成16年4月12日(月)
場所 振興会事務所にて

【出席者】
読売新聞社 編集局運動部 千葉直樹氏
時事通信社 運動部 小松将之氏

広報部会 小澤、大塚、黒川、壁谷、坂本

◇ はじめに ◇

バスケットは、何故もっとマスコミにとりあげられないのだろう？ という素朴な疑問は日頃誰もが抱かれている問題とされます。

今回は、バスケット担当として現在第一線でご活躍中の記者の方々をお招きして、その辺の事情やお考えについてお伺いしながら意見交換をさせていただき機会を得ましたので、以下にご披露いたします。

私たちの「日本のバスケットをもっともっと盛り上げたい」という強い思いを一步一步実現していくためには、こうした現実の諸事情をも充分踏まえる必要があらうかと思われまますのでご参考にしていただければ幸いです。



千葉直樹氏
読売新聞社
編集局運動部



小松将之氏
時事通信社
運動部

オリンピック出場

【広報部】

本日はお忙しいなかご出席いただき有難うございます。

私たちはバスケットボール界の振興後援団体として、いろいろな面から日本のバスケットを盛り上げようと自主的に活動している会です。

バスケットの情報がより多くマスコミに取りあげられ、テレビや新聞紙面を賑わすようになることもメジャー化に向かうひとつの大道だと考えますが、まず私たちとしてはどのように考えて、工夫努力することが良いのか、といった点につき率直なご意見を伺いたいと思います。

【記者】

1月に仙台で開催された女子アジア選手権で韓国に勝ってアテネオリンピック出場権を獲得しましたが、いつもバスケットの記事は記録しか載らない殆どのスポーツ紙が、1面から大々的に取りあげて報道しました。特にオリンピックに出場することは、マスコミが積極的に取りあげやすい出来事なのです。

選手を鍛えて日本代表チームを強くし、常にオリンピックに出場するのは勿論大変重要ですが、選手を鍛えるために国内最高レベルのリーグを活性化してゲーム数を増やし、その中で育成するのもひとつの方法ではないでしょうか。

日本のトップリーグはNBAなどと比べるとゲーム数が少ないですね。男子は今シーズンから各チーム当たり7ゲーム増やしましたが、それでも少ないと思います。

現状でゲーム数を増やすことは、企業の負担も大きくなって大変なのでしょうが、もう少し多くてもいいのではと感じます。

【記者】

マスコミではどうしてもオリンピック絡みの方が記事として載せやすいです。バスケットに関する

主な記事としては、ここ4～5年企業のリストラによる休廃部の問題が多かったように思います。

サッカーJリーグのように、地方の開催でも盛りあがって観客が多くつめかけるようでない、報道としてもなかなか取りあげにくいです。

昨今のバスケットスーパーリーグやWリーグは強弱が大体はつきりしていて、新鮮味が乏しいですね。マスコミの記事になるには記者が直接現場に行き行って取材する必要がありますが、インカレなどは殆ど行きませんし、JBLが細かいインフォメーションなどを送ってくれましても、紙面にはあまり反映されません。したがって結果のスコアだけを掲載することになってしまいます。それよりもリーグを活性化したり、新しい注目選手を育てたりする方が記事になると思います。

スター選手の発掘

【記者】

スター選手を生み出すことも必要で、少々強引でもやった方がいいと思います。私はバレーも担当していますが、バレーは世界的な大会を日本で開催し、それをテレビと組んでゴールデンタイムに放映し、強引にスター選手を作っています。

先般のワールドカップでも、最近話題になっている女子の“19歳コンビ”や、若いタレントをゲストとして呼んだ応援方法などで、プレイ以外でも注目度を上げようとしています。

手法の良し悪しはともかくとして、テレビという媒体を通じてバレーそのものを一般に認知させていますので、結果的に選手の知名度も上がり、ファンが増えるというサイクルになっています。バレー会場に来ている観客層をみると、30代40代の女性がかかり多いですし中高校生も相当きています。中年の女性が多いということは、少し前の中垣内選手や川合選手らのファンだったのではないかと推測されますが、今でもそれを上手く引きずっているといえます。

バレーがテレビと組んで良い時間帯に放映し、会場に多数のファンを呼び寄せられるのは過去の遺産があるからだと思います。東京オリンピックを始めとして、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールとメダルを取っている実績が大きいです。

残念ながらバスケットにはそういう形の過去の遺産がない点が弱いところですね。バスケットの会場に来ている観客は本当にバスケットが好きで見に来ている人が多いし、スポーツを見る目としてはバスケットの方が正当なのかも知れませんが、動員力の方は欠けています。ミーハー的なバレーの方が一般的に親しまれて観客が集まっているようで、その点バスケットは一般観客(大衆層)への広がりが不足しているように思われます。

先日のWJBL決勝戦とかオールジャパンの決勝とか、結構観客が集まって満員になるときもあるのに、それがコンスタントでないところが問題でしょうね。

【広報部】

バレーは「ママさんバレー」の組織を活用して観客が動員されていると聞いています。バスケットでも「ママさんバスケット」があるのですが動員面では弱いようです。

【記者】

ママさんバスケットのチーム数はどれくらいあるのですか？

【広報部】

ママさんバレーは全国に約9000チームあるようですが、ママさんバスケットのチーム数は約360チームですので、底辺の差異もあるかと思えます。

【記者】

バスケットでもミニバスなどはチーム数も多く全国大会も盛りあがっていますよね。この辺はバレーより凄いいところだと感じています。

【広報部】

バスケットの競技人口は結構多いのに、それが各層に幅広く浸透していないのが弱点です。

トップリークの活性化

【記者】

今年のJBLのベスト4をみると首都圏にいるチームは東芝だけ、東京とその近辺に強いチームがないのも盛り上がらない一因ではないですかね？

JBLが制度化しているホームタウン方式はいい制度だと思うのですが、実際にはそのホームタウンの試合数にばらつきがあったりして、今ひとつ徹底してないですね。

【記者】

最高リーグの活性化は非常に大事な問題だと思います。ひとつの活性化方策としてプロ化があり、最近では企業の意向もあってすぐには無理なようですが、それでもプロ化は前向きに考えたほうが良いと思います。

以前プロ化志向がかなりあったのに残念なことです。当面は少しでもプロに近づける形にしたいと思っています。

【記者】

そうですね。現状のようにその場しのぎのやり方では前進しないのではないのでしょうか。プロ化すればチームがもっと強くなり、バックアップする企業名も、大きくマスコミに取り上げられるというメリットもあるのですが、昨今の経済環境を考えれば、おいそれとは手を出せない。

【記者】

サッカーではチーム名に企業名を出してはいけないルールになっていますが、実際には企業が投資してやっていますし、その企業名も知られています。協会が強力なリーダーシップを発揮して全体を引張

っているのが強みなのですが、サッカーの場合でも最初は赤字の連続で、黒字になったのはここ2～3年のことです。

鹿島アントラーズを例にとると、住友金属がバックアップして地域の活性化も含めてやったところうまく成功し、地元では“自分たちのチームができた”と地域住民も盛り上がるし、マスコミも大いに取りあげるといって好結果につながっています。

【記者】

新潟アルビレックスなどもなかなか面白いやり方をやっています。地元新潟ではサッカーもバスケットも動員力があって盛り上がっています。

【広報部】

記者の方々が主に取り上げられるとすればどのレベルのバスケットでしょうか？

【記者】

やはりトップリークですね。あとは高校生の大会など。高校生の大会は野球の甲子園のように盛り上がりもあるし観客も多いですから、毎年それなりに掲載スペースがあります。それらに比べて大学の試合は殆ど見に行きません。レベル的には大学の方が上だと思いますが、不思議なことにあまり興味がありません。やはり高校生の大会の方が記事になる要素が多いですね。

【広報部】

昔は関東レベルの大会でも新聞に詳しく結果が掲載されたものですが、最近掲載されないのは何故でしょうか？

【記者】

スポーツ界全体のバランスから関東のレベルまでは掲載されませんが、スポーツの紙面は以前よりかなり広がっているのですが、それだけ競技種目も増えているので全国レベルでないと対象になりません。

現在テーブルスコアを掲載しているのはサッカーと野球ぐらいで、他のスポーツ種目は殆ど試合結果だけとなります。

【広報部】

バスケットもミニバスなどは相当な競技人口なのに、あまり記事にならないようですか？

【記者】

競技人口が多いことと、記事になるということとは別です。要は注目度で、例えば男子バスケットのトップリーグでみますと、現行の企業チームに採用される選手は大学卒で、高校卒は見当たりません。高校卒でもいい選手だったら、若いうちからトップリーグへ入れて、どんどん伸ばしていくことも注目を浴びる要因となるのではないのでしょうか。

最近ではNBAでも高校卒の選手が活躍していますし、高校卒の選手でも日本代表に選ばれるような道筋をつけたら面白いと思いますね。

日本代表チームについて

【広報部】

最近男子の日本代表チームのヘッドコーチ・パブリセヴィッチ氏が、若い選手にも目を配って強化していますので、やがては高校卒の選手も代表選手に出てくるのではないのでしょうか。

【記者】

日本代表選手の強化という面では、日本国内で開催される国際大会が少ないように思われます。定期的に開催されるのはキリンカップぐらいで、あとは殆ど海外遠征になってしまいます。

国内で開催することによって選手のステータスをもっと高め、代表選手としての自覚を促し、戦う姿勢をアピールすれば注目度も違ってくるでしょう。

【記者】

パブリセヴィッチ氏は一生懸命強化に取り組んでいると思います。問題は選手を出しているチーム側にあるのであって、JBLも大学もリーグ戦が始まる前から選手を抱え込んでしまって代表チームの練習に出さないことがある。

各チームとも負けるのがイヤだから良い選手を送らない、代表選手なのに代表としての練習が少ないからいつまで経っても強くならない、という悪循環があると見ています。サッカーのように成熟した選手ばかりなら、集まってすぐに国際試合でもできるでしょうが、バスケットはそうはいかない。この辺にも問題があるのではと思います。

【広報部】

記者の皆さんが試合会場へでかけたり、記事にされたりする目安のようなものがありますか？

【記者】

そういうものは特にありませんが、単なる勝ち負けや、そのスコアだけでは記事になりません。記事にするには切り口となる“話題性”が重要で、選手の特異な経歴とか、面白いスター選手などがその切り口となります。

【記者】

バスケットを担当している記者は、どこの社でも他の競技と掛け持ちですので、なかなか連続して会場に足を運ばません。継続して見ていないと話題性のある記事は書けませんし、たまに書いても掲載記事にもならないのです。

【広報部】

バスケットはおっしゃるような“話題性”に乏しいのでしょうか？また、どのような話題が魅力的なのでしょう。

【記者】

記事になるのはなんといっても“話題性”です。よ

く細かい試合戦評等を送っていただきますが、なかなか紙面には反映できません。それよりも各チームから選手の特徴や珍しい話などを知らせてもらった方が役に立ちます。

過去アメリカに挑戦した日本人選手が何人かいますが、そういう選手の話の方が注目される話題性があります。田臥選手がトヨタに入ったときは大いに話題性をまき起こして良かったのですが、すぐにいなくなってしまい残念でした。

【記者】

外国でプレイしている選手が日本に戻って代表チームでプレイすることは、サッカーの中田選手のようにかなり注目を集めると思います。そういう意味では日本人選手がアメリカなどの外国へ行って活躍するのはいいことだと思います。例えば、田臥選手が日本代表でプレイしたら大きな話題性がありますね。ただ、外国へチャレンジ修行に行くためのルートがはっきりしていませんから、そういう選手がなかなか出ません。できたら外国へ挑戦するような選手の情報なども欲しいですね。

情報の発信

【記者】

チームからいろいろと情報をもらったからといって必ず記者が食いつくかどうかわかりませんが、情報がないよりも提供してもらった方がいいと思います。もう少し情報があればなかには食いつけることもあるのではと思います。サッカーなどは、選手に子供が生まれたことまで情報として発信してくれます。

選手の出入りとかも含めてシーズン節目のときは是非とも情報ををいただきたいですね。先程も言いましたが、担当兼任記者が殆どですので、記者会見をやっても必ずしも出席できない場合があります。ましてや東京以外にいるチームは取材しにくいので、FAXで結構ですから情報発信をお願いした

いです。プロ野球やサッカーには専任記者がいますが、バスケットはいませんので、専門誌を見て始めてわかるといったような情報もあります。

【広報部】

協会やJBL、WJBLなどからの情報はどのようにでしょうか？

【記者】

全日本代表の動きなど、最近はインターネットを含めてよく情報を流してもらっていますので、そこを見れば記事も書けます。特に全日本女子はオリンピックに出場するというので、専任広報担当において情報を発信してくれていますので助かっています。

反対に各チームの情報は皆無に近いので、その辺が話題性に欠けます。例えば、新潟アルビレックスは地元のマスコミにはよく取りあげられていますが、東京にまでは情報が届きません。やはり地元と東京のそれぞれで取りあげてもらった方が全国的にも周知できます。

【広報部】

今回女子がオリンピック出場切符を獲得しましたが、話題性としては如何ですか？

【記者】

良かったと思いますが毎回オリンピックに出るようでないといけませんね。女子について言えば、1996年のアトランタに出場した後、2000年のシドニーには出場できませんでした。1度出場を逃がしてしまうと8年という期間が過ぎますので、どうしても忘れられてしまいます。今回はそれだけに余計注目されたのだと思いますが、やはり連続してオリンピックに出場した方が記者として食いつきやすいです。

そんなわけで女子はまあまあですが男子はまだまだですね。男子も女子と同じように頑張ってくれる

とマスコミの注目度も相当違ってくると思います。代表チームがある程度強くなって注目を浴びないと話題性は長続きしませんね。

サッカーを例にとって言えば、Jリーグの試合はあまり見ないのに、日本代表チームが出る試合は公式戦でなくても見るという人が多いです。テレビでも結構取りあげて放映したりしますから。海外では歴史のある国内リーグの人気が高く、代表一辺倒という傾向はありませんが、サッカー文化が成熟していない日本では、代表チームが注目されることは大事です。

【広報部】

代表チームの強化につなげる意味で若い選手を一貫して育成強化するため、協会は専任コーチを採用して、中高校生を全国的に同じレベルで育成する施策をとっています。

【記者】

エンデバー制度を中心に、一貫強化の枠組み作りが始まりましたが、バスケットの場合、特にバレーボールなどとの間で長身選手の争奪戦が激しいという話も聞きます。好素材を早い時期にこちらの土俵に引っ張り込めるかどうかも重要な要素です。

振興会のこと

【広報部】

最初に振興会のことを説明しましたが、他のスポーツ団体でそのスポーツの普及、発展を応援するような組織はありますか？ 振興会について一言お願いします。

【記者】

他のスポーツであまり聞いたことはありません。振興会はバスケットの先輩方の集まりで、経験もあって知識や実績を持っている方々が多いと思いますので、もっと活躍されてもいいと思います。協会も

こういう貴重な組織を活かさない手はないと思いますし、振興会としても協会と連携をとって活動されたいら、バスケット界のために大いに役立つのではないのでしょうか。

また、先輩の立場から協会に対して率直に話のできる団体があってもいいかと思います。外野ならではの建設的な意見も貴重なことですから。

【記者】

2006年に世界選手権が日本で開催されますが、このように大きな大会は運営ひとつとっても大変難しいことで、平素時間をお持ちの先輩方が経験を生かして協力されるのもひとつの方法ではありませんか。

【広報部】

私どもの会報「バスケットボールプラザ」なども情報源のひとつとしてお送りしたいと思いますか？

【記者】

送っていただければなにかと役に立つと思いますし、振興会の理解にもつながると思います。

【広報部】

これからも記者の方々との交流する機会をできるだけ多く持ちたいと思っております。

【記者】

交流について言えば、こちらから要求するなどということはできませんが、協会を含めて交流の機会は平素からあったほうがいいですね。顔見知りになることで気さくに話も聞けますし、そのことが話題性をもたらす結果になることもありますので。

【広報部】

本日はお忙しいところ大変有難うございました。また機会を設けたいと思いますのでその節はよろしく願いいたします。